

小林多喜二宛て志賀直哉の書簡（差出日：1931（昭和6）年8月7日）

8月7日 小林多喜二宛〔東京市外杉並町成宗八八 田口氏方〕〔封書〕奈良市上高畑より
手紙大変遅れました。

君の小説、「オルグ」「蟹工船」最近の小品、「三・一五」といふ順で拝見しました。

「オルグ」は私はそれ程に感心しませんでした。「蟹工船」が中で一番念入ってよく書いてみると思ひ、描写の生々と新しい点感心しました。

「三・一五」は一つの事件のいろいろな人の場合をよく集め、よく書いてあると思ひました。

私の気持から云へば、プロレタリア運動の意識の出て来る所が気になりました。小説が主人持ちである点好みません。プロレタリア運動にたづさはる人として止むを得ぬことのやうに思はれますが、作品として不純になり、不純になるがために効果も弱くなると思ひました。大衆を教へると云ふ事が多少でも目的になってゐる所は芸術としては弱身になってゐるやうに思へます。さういふ所は矢張り一種の小児病のやうに思はれました。里見の「今年竹」といふ小説を見て、ある男がある女の手紙を見て感激する事が書いてあり、私は里見にその部分の不服をいった事がありますが、その女の手紙を見て読者として別に感激させられないのに主人公の男が切に感激するのは馬鹿々々しく、下手な書き方だと思ふといたのです。力を入れるのは女の手紙で、その手紙それ自身が直接読者を感動させれば、男の主人公の感動する事は書かなくていいと思ふと云ったのです。

君の「蟹工船」の場合にさういふ風を感じたわけではありませんが、プロレタリア小説も大体に於てさういふ行きの方が芸術作品になり、効果からいっても強いものになると思ひます。

プロレタリア芸術の理論は何も知りませんが、イデオロギーを意識的に持つ事は如何なる意味でも弱くなり、悪いと思ひます。

作家の血となり肉となったものが自然に作品の中で主張する場合は兎も角、何かある考へを作品の中で主張する事は芸術としては困難な事で、よくない事だと思ひます。運動の意識から全く独立したプロレタリア芸術が本統のプロレタリア芸術になるものだと思ひます。

フィリップにしる、マイケル・ゴールドにしる、かなり主観的な所はあつても誰れでもがその境遇に置かれればさう感じるだらうと思はれる主観なので素直にうけいられれます。つまり作者はどういう傾向にしる兎に角純粹に作者である事が第一条件だと思ひます。絵の方でいへばキュビズムは兎に角純粹の絵の上の運動なるが故に生命があり、未来派は不純な要素が多く、その為め、更に物が生ずる事なしに亡んだやうに思ひます。

トルストイは芸術家であると同時に思想家であるとして、然し作品を見れば完全に芸術家が思想家の頭をおさへて仕事されてある点、矢張り大きい感じがして偉いと思ひます。トルストイの作品でトルストイの思想家が若しもっとのさばつてみたら作品はもっと薄っぺらになり弱くなると思ひます。

主人持ちの芸術はどうしても希薄になると思ひます。文学の理論は一切見てみないといつていい位なので、プロレタリア文学論も知りませんが、運動意識から独立したプロレタリア小説が本当のプロレタリア小説で、その方が結果からいっても強い働きをするやうに私は考へます。

前に洋文から「魚河岸」といふ本を貰い、その前、津田青楓にすすめられて「ゴー・ストップ」といふ本を見たきりで所謂プロレタリア小説といふものは他に知らないのですが、前の二つとも作品としては兎に角運動が目的なら、もう少し熱があつてもよささうなものだと感じましたが、その点君のものには熱が感じられ愉快でした。それに「ゴー・ストップ」（比較は失礼かもしれませんが）などに出て来る女の関係変に下品に甘ったるいのがいやでしたが、君のものではさういふ甘ったるさなくこれも気持よく思はれました。

色々な事露骨に書いてある所も不思議に不快な感じがなく大変よく思ひました。態度の真面目さから来るのだと思ひました。

それからこれは余計な事かも知れませんが、ある一つの出来事を知らせたい場合は、却つて一つの記事として会話などなしに、小説の形をとらずに書かれた方が強くなると思ひました。かういふ事は削除されて或ひは駄目なのかと思ひますが、さういふ性質の材料のものは会話だけで読んでゐてまどろっこしくなります。

それから「蟹工船」でも「三・一五」でも正視できないやうなザンギャクな事が書いてある、それが資本主義の産物だといへばいへるやうなもの、又さういっただけではかたづかない問題だと思ひました。作品の運動意識がない方がいいと云ふのは私は純粹作品本位でいった事で君が運動を離れて純粹に小説家として生活される事を望むといふやうな老婆心からではありません。

八月七日 志賀直哉

小林多喜二様